

閲覧ニュース 113号

2013.10



《本》と文学と図書館 ― 書物メディアのたどる道

林 志 津 江

ドイツ語の教員である私は、そもそもドイツ文学の専門家です。そして文学研究が生業の私にとって、《本》はなくてはならないものです。《本》を収める図書館も本当に身近な存在です。なぜなら皆さんもご存知の通り、文学は長らく《本》というメディアによって媒介されてきたものだからです。

私たちの日常において《本》がごくありきたりなものとなったのは、印刷術の発明があったからです。例えばヨーロッパでは、15世紀にドイツでヨハネス・グーテンベルクが活版印刷を発明したことにより、印刷術が急速に広まりました。そしてこの発明がなければ、マルティン・ルターの宗教改革も起こりませんでした。

『聖書』という書物を聖職者の専売特許にとどめ置かず、信者ひとりひとりに身近なものにすることが宗教改革の目指す道だったわけですが、印刷術こそが『聖書』の大量生産を可能にし、その教えをダイレクトに伝わるものへと変化させたのです。技術は歴史を作ります。だからこそまた《本》による書物の普及こそが、識字教育をになう学校制度の整備の原動力にもなりました。ルターの出現を許し、宗教改革に熱心だったドイツ諸国は、ヨーロッパの中でも義務教育の浸透が早かったと言われています。

そして文学も、口承されたものを聞くスタイルから、書かれたものを読書するというスタイルに変化してきました。ちなみにドイツで最初のベストセラー小説は、ドイツの大文豪ゲーテの『若きヴェルテルの悩み』（1774年）だと言うことです。ヴェルテルという青年が、婚約者のいるシャーロットという女性に恋し、叶

わぬ思いに耐えきれずピストル自殺してしまうというこの物語は、当時の若者たちの間に一大センセーションを巻き起こしました。ヨーロッパではその後しばらく、ヴェルテルに追随し自殺する若者が後を断たなかったそうです。この作品の日本語訳は簡単に入手できる一冊で、もちろん教養図書館にも収められています。秋の夜長、ヴェルテルの気持ちに共感できそうかどうか、自分で読んで確かめてみるのもいいでしょう！

近年のIT化は、文学の姿を大きく変貌させています。ケータイ小説やKindle（電子書籍）の誕生など、状況の変化と技術革新は日進月歩です。そしてグーテンベルクを生んだ国・ドイツから発せられる文学の研究者である私にとって、その変化の動向を観察するのは一方で当然のことです。実際に現在のドイツ文学研究の現場では、書物メディアの歴史を批判的にたどる研究が、当たり前のように行われています。しかし今しがた確認してきたように、技術こそが歴史を作るのだとしたら？紙とインクによる《本》が風前の灯火にさらされる今日状況に対し、文学研究者の力なぞひとたまりもありません。今後、《本》は、書物は、図書館はどのような未来をたどるのでしょうか。《本》と文学の置かれた状況を直視しつつ、《本》のたどった歴史をたんねんに振り返ることが、せめてもの抵抗になりうるのかどうか？私は今日も、《本》と図書館とそこで働く人々に支えられ、格闘しています。

（人文社会科学）

後期開館スケジュール	
	開館時間
9月7日～12月25日（後期授業終了）まで	平日 9：00～19：00
	土曜 9：00～13：00
	閉館
年末年始 1月6日～1月21日（後期試験終了）まで	平日 9：00～19：00
	土曜 9：00～13：00
	平日 9：00～17：00
後期試験終了後	平日 9：00～17：00
	土曜 9：00～13：00
休館日：日曜日、祝日、第2・4土曜日、本学記念日	
そのほか、臨時閉館や開館時間の変更があるときは、その都度掲示でお知らせしますのでご注意ください。	

図書館利用のすゝめ

中 戸 照 恵

映画「図書館戦争」、良かったですね。図書館そのものが舞台の中心になる作品は珍しいので、とても興味深く鑑賞しました。作中に、いろいろな図書館が出てきました。綺麗な図書館や、不思議な形の図書館があり、是非一度足を運んでみたいと思っています。

さて、皆さんは普段どれくらい本を読みますか？教科書として指定されたものを読む以外に、図書館・書店で本を手にとって、これを読もうか、あれを読もうかと考える時間はどれくらいあるでしょうか？

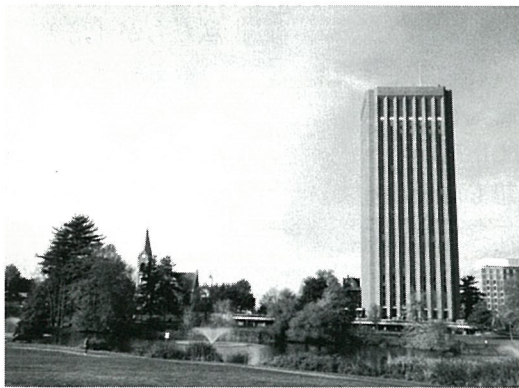
アメリカの大学生・大学院生はとても頻繁に図書館を利用します。授業で指定された文献を参照することはもとより、一日に何時間も自習をしたり、ペーパーバックの小説を読んだりしています（最近はタブレットの場合も）。私が訪問した大学では、通称タワーライブラリーと呼ばれる、とても背の高い図書館があり、私もよくその図書館で時間を過ごしました。各階に自習スペースがあり、ある階には個人的なスペースが確保できるよう配慮され、ソファとテーブルがあり、何時間過ごしてもまったく疲れないという快適な場所がありました。さらに素晴らしいことに、飲食が許されていました。一階のカフェテリアのようなところでスープ・サンドウィッチ・コーヒーなどを購入することができます。それらを手に、建物の上階へあがり、景色を眺めながらあれやこれやと思考を巡らすのは、とても楽しい時間でした。

図書館でいろいろな国・分野の本に囲まれて過ごす時間は、私にとってはとても大切な時間です。残念ながら日本の図書館では、飲食はできないことが多いですが、皆さんも、本を片手に図書館で時間を過ごしてみてください（あるいはブックカフェでも）。そして、試験勉強・レポート課題の下調べ以外に、専門分野とは全くかけ離れた世界で、静かに思索する時間を持つことをおすすめします。

参考までに、私が皆さんくらいの年齢のころからこれまでに読んできた本の中で、印象に残っているもの

を、10名の作家別に列挙します。いわゆる「純文学」ばかりではなく、比較的読みやすいものを。機会があれば、図書館・書店で手に取ってみてください。皆さん自身の感性でその世界を楽しむのが良いと思いますので、私からの内容紹介は省略します。

1. 藤原正彦著 『若き数学者のアメリカ』（新潮文庫）
『遥かなるケンブリッジ——数学者のイギリス』（新潮文庫）
2. 遠藤周作著 『白い人・黄色い人』（新潮文庫）
3. 司馬遼太郎著 『坂の上の雲』（文春文庫）
4. ヨースタイン・ゴルデル著、池田香代子訳
『ソフィーの世界——哲学者からの不思議な手紙』（NHK 出版）
5. 土屋賢二著 『ソクラテスの口説き方』（文藝春秋）
『ツチャ学部長の弁明』（講談社文庫）
6. 三浦しをん著 『舟を編む』（光文社）
7. 万城目学著 『鴨川ホルモー』（角川文庫）
『プリンセス・トヨトミ』（文春文庫）
『かのこちゃんとマドレーヌ婦人』（角川文庫）
8. 森見登美彦著 『夜は短し歩けよ乙女』（角川文庫）
9. 武論尊原作、原哲夫作画 『北斗の拳』（集英社文庫）
10. かわぐちかいじ作 『沈黙の艦隊』（講談社漫画文庫）



映画やアニメなど、映像化されたものも多くありますが、原作を読んで、映像とは異なる「おもむき」を楽しんでください。

ちなみに、私が一番好きな本は、この中にはありません。その本には、高校時代に出会いました。そして、今でも時折読み返しています。その時々で、印象に残る部分が違ったり、同じ

文の解釈が違ったりします。皆さんも、繰り返して手に取りたい「大切な」一冊に出会えるといいですね。「読書の秋」をそれぞれに楽しんでください！

（英語）

お知らせ

2階の書架にあった000（総記）・100（哲学）部門が地下に配架されています。

〈紅子の心〉と〈培養器の中の脳〉

大石 敏 広

我が家には猫がいます。紅子（べにこ）といいます。白く長い毛をしたメス、たぶん6、7歳。3年前、道の真ん中でぼんやりと長い間たたずんでいたのをスカウトしてきたため、どこでどうやって生まれ育ったのかは全く分かりません。謎多き彼女のことをもっと知りたくて、本人に色々尋ねてみるものの、「ニヤハ」という返事が一体何を意味するのやら？

というわけで、我が家には猫に関する本が何冊もあります。最近新しく買ったのが、野澤延行著『猫に言いたいたくさんのこと』（池田書店）という本。表紙には、何かの下にもぐりこんでじっとしている猫と、その様子を覗き込んでいる人の後姿が描かれていて、「こういう場面あるある!」と思わず立ち読みしたのがきっかけでした。

この本には猫への問いかけがいくつも載っています。例えば、気持ちよさそうになでられていたのに、急にパンチを出され、「さっきまで気持ちよさそうだったのに、どうして?」、また、じっと一点を凝視している猫に「何が見えるの?」といった問いかけです。我が家でもよくする問いかけです。この問いかけに対して著者の野澤さんの解釈が付いています。先の例で言いますと、「急にパンチをするのは、いらだっているのではなく、無意識の防御反応である」、「じっと一点を凝視しているように見えるのは実は、聴覚を集中させているからである」。ああ、やっぱりそうかと思うこともあります。なかには予想もしなかった解釈もあります。著者は、自分の知識だけに頼らずに、多くの猫と触れ合うことによって猫からできるだけ返事をもらってこの本を書いたということです。猫には言葉は通じませんが(?)、体と体の触れ合いによって猫の気持ちを知ることができる、ということでしょうか。

猫つながりということで、一風変わった本を紹介します。永井均著『翔太と猫のインサイトの夏休み』（ナカニシヤ出版）という本です。この本

では、哲学的問題について、人間の翔太と猫のインサイトが様々な対話をします。その中に、インサイトが翔太に、「培養器の中の脳」という話をする場面があります。それは次のような話です。——人口増加のために他の星に移住した人類であったが、その移住先の星は人類の生存が困難であった。そこで天才科学者X博士は、移住者全員を脳だけの状態にして、培養液の入った巨大な培養器の中に入れ、神経の末端を精巧なコンピュータに接続した。コンピュータは、脳の中で電気化学的变化を引き起こして、見たり、感じたり、考えたり、運動感覚を持ったりする幻覚を引き起こすようにプログラムされていた。

さて、私たちがこの「培養器の中の脳」ではない証拠はあるのでしょうか? この話は論理的に矛盾していません。自然法則に反しているわけでもありません。私たちが経験している現実とつじつまが合わないところもあります。なにしろ、この現実が丸ごとすべて脳が見ている夢だ、というわけですから。

私は、紅子自身が何を考えているのか知りたいと思います。野澤さんは、共に暮らしていると猫の気持ちが分かるようになると思います。でも、私たちが「培養器の中の脳」であるならば、そもそも紅子は私の脳が見る幻覚にすぎないということになります。紅子自身の心（気持ち）など存在しないということになります。そんなこと、なぜか受け入れがたい気持ちがします。しかし、???

たとえ私たちが「培養器の中の脳」だとしても、私たちは実に様々なことを考えます。その思考を助けてくれるのが、本です。ただし、本の世界を巡ったら、今度はその世界の殻を打ち破って新たな世界へと飛翔するという思考の醍醐味を味わって欲しいと思います。これは、自分自身に対する願望でもあります。

(人文社会科学)

閲覧ニュース113号 2013.10 発行

発行責任者 高 津 昌 宏

北里大学教養図書館

〒252-0373 相模原市南区北里 1-15-1

電話 (042) 778-8005